

彦根藩主井伊家旧蔵絵巻「仮面正摸」に関する考察 —現存する能狂言面絵画資料の検討を通じて—

大谷優紀（早稲田大学）

近世において彦根藩主井伊家では能が盛んに行われ、能面をはじめとした能道具が多数収集されていた。残念ながらそうした能道具の多くは大正期に関東大震災で焼失してしまっているが、彦根藩第十四代藩主井伊直亮が同家の所蔵面について記した『能面心覚記』（彦根城博物館所蔵）から当時のありようを窺い知ることができる。

本発表では同資料に記録される井伊家旧蔵品の中から、「仮面正摸」という絵画作品を取りあげ検討していく。『能面心覚記』によれば、同作品は井伊家としばしば能道具の売買を行っていた観世座能役者の深尾権之丞から購入したもので、深尾家のすべての所蔵面を描いた絵巻であったという。また、同書には絵巻の箱書が転記されており、そこから同作は深尾家の依頼で幕府奥絵師である浜町狩野家の狩野融川寛信らが制作したことが明らかになる。

能狂言面を主題とした絵画作例は数少なく、特に専門の絵師の手による作品は非常に珍しいといえる。「仮面正摸」は、近世の能狂言面について知るうえで重要な手がかりとなるとみられるが、現在資料の存在は確認できておらず、井伊家旧蔵能面と同じく震災で失われてしまった可能性も考えられる。そうした中で、発表者は宮内庁宮内公文書館所蔵の「能面之図」を「仮面正摸」の模写資料として見出した。

「能面之図」は紙本着色の写本で、肉筆で五十一の能狂言面の図が描かれる。資料中の印から岸派の絵師である岸九岳によって近代に模写されたことがわかるが、原資料についてはこれまで明らかにされてはこなかった。

二点の資料の関係性を示す根拠として、「能面之図」中の姥面と狸面の図が挙げられる。本図は面の構造から細部の特徴に至るまで、狂言大蔵流山本東次郎家所蔵の姥（狸尼）面と狸面に類似していることが指摘できる。同面は井伊家の面をもとに作られた大正期の模作面であり、井伊家の『能面心覚記』にもこのモデルとなった作品の記録が確認できる。さらに注目すべき点として、同書には二点の面が「仮面正摸」と同じく深尾権之丞から購入したものだとして記されているのである。前述のとおり「仮面正摸」は深尾家のすべての所蔵面を網羅した絵巻であった。もともと深尾家が所持していた面に基づいて作られた山本東次郎家の面と「能面之図」中の図との間に類似がみられることから、「能面之図」は「仮面正摸」を写したものである可能性が高いと考えられよう。

さらに、「能面之図」と画風や形式が類似し、同じく「仮面正摸」の摸本とみられる作例として、本発表では「能面彩色手控巻」（篠山能楽資料館所蔵）および「能面図」（野上記念法政大学能楽研究所所蔵）を取りあげる。これら三点の作品をあわせると合計一一五種もの図が確認でき、その中には現在見られないような特殊な面も散見される。三点の資料は近世の能狂言面の受容の様子を伝えるものとして、非常に貴重であるといえるだろう。